

北海道大学大学院医学研究科/医学部医学科



号 49

2011 (平成23) 年10月

◆研究科長より	・高校生メディカル講座:小樽潮陵高校編 1]
フラテ祭について	・高校生メディカル講座を担当して 12
◆学内行事など	・平成23年度 医学研究科・医学部 教育ワークショップ(フルFD)開催 13
・オープンキャンパスを開催して 入試委員会アドミッション実施部会 2	◆お知らせ
・第7回北海道大学大学院医学研究科・	・医学研究科・歯学研究科合同慰霊式を挙行] 4
医学部医学科音羽博次奨学基金授与式について … 4	・動物慰霊式を挙行
◆学術・教育・一般	・陽子線治療研究施設新営工事の状況について … 15
・教授就任挨拶・「新たなるステージに向かって」 5	・平成23年度 医学研究科・医学部医学科 「優秀研究賞」、「優秀教育賞」、「優秀論文賞」及び 「特別賞」受賞候補者の推薦について15
・大学院教室紹介 ・「耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野」 6	・平成23年度 医学部医学科学士編入学 (第2年次第2学期)試験結果について 16
・プレスリリース	・第106回医師国家試験について16
・脊椎感染症に対する最小侵襲鏡視下手術 - 北海道大学病院にて先進医療認定 8	・平成24年度 大学院入学試験について 16
・医学研究科・医学部の受賞関係リスト 8	・平成23年度 財団等の研究助成採択状況 17
・学生の見たマッチング、研修病院選び 9	·平成23年度 科学研究費補助金採択状況 ·······17
· 第54回東日本医科学生総合体育大会 ········ 10	広報室便り 19・編集後記

研究科長より

フラテ祭について

木 長 良 (たまき ながら) 医学研究科長・医学部長



今年も初秋の涼し さを感じる9月18日 (日) に恒例の北海道 大学医学部フラテ祭 2011を実施すること ができました。

今年は従来からの医 学部同窓会員の皆様の 参加に加えて、会員の 方々とほぼ同数の現役 学生の保護者の方々の

参加をいただけたのが印象的でした。特に子弟・子女の 方々がどのような環境下で勉学に臨んでいるのか、興味

をもたれた方が多かったのでしょうか。施設ツアーや講 演会の中でも、学習環境に注目が集まっている印象を受 けた今年のフラテ祭となりました。

昨年完成した真新しい医学部学友会館「フラテ」(以 降、フラテ会館)のホールに集合し、この会館をフルに 利用してフラテ祭を執り行いました。まず第一部として 施設・キャンパスツアーを実施しました。このツアーに は医歯学総合研究棟や医学部図書館の講義室を主体とし た医学部施設巡りのコース、高度先進医療支援センター や検査・輸血部、放射線部などを主体とした病院巡りの コース、およびキャンパス全般をバスで巡るキャンパス 巡りのコースを用意しました。この第一部には111名の 方々のご参加がありました。また第二部では講演会とし

て、私が医学部の取り組みを、福田病院長からは病院の現況を、そして同窓会員を代表して福島県立医科大学の藤田禎三名誉教授に「補体レクチン経路の自然免疫における役割」と題したご講演をいただきました。第二部には155名に及ぶ多くの方々のご聴講がありました。講演会の最後に音羽博次基金授与式を執り行いました。多くの参加者の前で授賞式をおごそかに実施でき、受賞者には良い記念になったことと思います。さらには第三部としてフラテ会館ホールとなりの大研修室にてフラテ交歓会を実施しました。懇親の場を通して昔懐かしい方々と旧交を温める場になったことと思います。前北海道大学医学部同窓会長の齋藤和雄先生の祝杯により開会し、



第一部 施設・キャンパスツアー

この場では本間研一先生に『写真集 北大医学部90年』 および『北大医学部九十年史』についての紹介をしてい ただきました。また、恒例の北大寮歌「都ぞ弥生」を人 の輪を作って合唱し、多くの同窓生の方々が学生時代を 懐かしんで歌われたのではないでしょうか。そして、最 後は福田北大病院長による乾杯にて締め括られました。 第三部にも102名と多くの方々にご参加いただきまし た。

今年のフラテ祭も成功裏に終了することができたと思います。ご参加された方々にはもちろん、フラテ祭を運営された実行委員会の皆様にもこの誌をお借りして心からお礼申し上げます。



第三部 スキー部による「都ぞ弥生」

2 学内行事など

オープンキャンパスを開催して 入試委員会アドミッション実施部会

渡邊 雅彦 部会長

今年のオープンキャンパスは、8月1日(月)に自由参加プログラム(高校生だけでなくご父兄や既卒受験生も参加できる企画)を、翌2日には高校生限定プログラムを行い、盛会のうちに無事終了した。ここ数年の傾向として、医学科企画への参加者希望者が年々増加し、定員をオーバーして企画に参加できない人の数が増えていた。そこで、昨年まで本部会長をつとめた岩永敏彦教授の発案で、今年の医学科企画では参加希望者をできるだけ受け入れるための改善を試みた。

自由参加プログラムには、昨年までは午前・午後の部とも定員を150名に限定していたが、今年は定員を設けず、昨年竣工した医学部学友会館「フラテ」ホールに収容できる限りの参加希望者を受け入れた。それは、放射線部、検査・輸血部、病理部を回る病院見学コースに先着60名の定員を設けて従来通りの引率方式で行う一

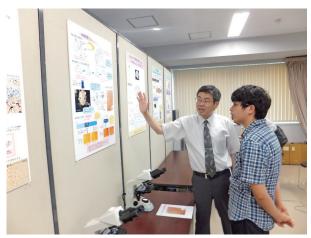
方、学部見学コースの定員をなくしたことにより実現できた。この学部見学コースでは、解剖学実習室で骨学実習、組織病理学実習室で組織プレパラート検鏡による模擬実習、第1講堂で組織学の模擬講義、電子顕微鏡室で最先端の研究機器紹介を同時開催し、参加者はこれらを自由に見学していく方式をとった。その結果、午前の部の参加者は298名(昨年度は161名)と倍増した。その分、午後の参加者は123名(同166名)と減少したが、参加者総数は421名となり昨年度に比べ約100名の増加となった。内訳は、札幌市内157名、札幌以外の道内146名、その他118名と、7割強が全道からの、残りが本州からの参加者であった。自由参加プログラムは、玉木長良医学研究科・医学部長の挨拶で始まり、医学部医学科紹介ビデオ上映、施設見学、そしてホールに再び戻っての質疑応答と、2時間余りの企画として行った。質疑

応答では、クラブ活動は活発か?、全学のクラブ活動にも参加できるのか?、将来専門とする診療科は学生のうちに決めるのか?、医学部卒業生は北大病院に残るのか?、北大医学部の強い点は何か?、昨年前期入試に導入した面接は既卒受験生や年齢の高い受験生を除外するのが目的か?など、進路や進学の情報を真剣に求める質問が多くなされた。午前の部に比べ、午後の部の参加者からの質問は少ないという傾向があった。参加者定員をなくしたことで、'医学科第1志望'の参加者は午前の部に集中した影響かと思われる。

高校生限定プログラムでは、昨年と同様に定員を100名とした。こちらの参加には事前登録が必要であるが、医学科の高校生限定プログラムは受付開始当日にその定員のかなりが埋まったと聞く。玉木長良医学研究科・医学部長による挨拶の後、田中真樹教授による「視覚系で見る脳の不思議」の講義を行った。講義では、視覚処理のプロセスや仕組みを、脳の障害にともなう視覚認知障害の例を示しながら、神経生理学の観点からわかりやすく説明した。その後、参加した高校生を2つのグループに分け、一方が実習室前方で病理学の実習を行っている間に、他方のグループは実習室後方の展示企画に参加した。実習では、田中伸哉教授が肺癌をテーマに解説し、正常な肺組織と癌化した肺組織について各自のプレ



北大病院での見学ツアー



渡邉教授から説明を受ける参加者

パラートを検鏡し、スケッチを指導した。展示企画には 解剖学講座、生理学講座、病理学講座、神経生物学分野 の教員と学生があたり、高校生への説明や質問への対応 を行った。終了時に行った無記名式のアンケートで印象 深かったことはという質問に対して、「脳を直にみるこ とができたこと。大学で研究されている先生方に質問で きたこと」(帯広柏陽2年、男子)、「どれも初めての体 験で印象に残りました。その中でも特に印象深かったの は、脳科学講義でした」(日大三島2年、男子)、「肺気 腫の方の肺が、普通の人に比べてこんなにもスポンジの ようなものだとは思いませんでした。また、肺がんや 子宮の筋肉種は思った以上に硬く、驚きました。同時 に、人体の仕組みの素晴らしさを実感しました。来年も 来たいです。」(横浜雙葉1年、女子) などの感想が寄せ られた。また、満足度の5段階評価(大変面白かった/ 面白かった/普通/つまらなかった/大変つまらなかっ た)では、満足度の平均が4.8、理解度の5段階評価(ほ とんど理解できた/結構理解できた/ふつう/あまり理 解できなかった/ほとんど理解できなかった)の平均が 4.2と、どちらも高い評価を得ることができた。

最後に、施設見学で説明していただいた放射線部の藤 間憲幸特任助教、検査・輸血部の重松明男助教、病理部 の久保田佳奈子助教、解剖発生学分野の山崎美和子講



田中伸哉教授による模擬講義



挨拶をする玉木学部長

師、電子顕微鏡室の中村秀樹助手、組織細胞学分野の岩 永敏彦教授、国際連携室の高野廣子講師に深く感謝した い。

また、施設見学で引率や質疑応答を担当したアドミッション実施部会の各部会員と吉岡充弘研究科長補佐、高校生限定プログラムの準備と実施を担当した田中真樹教授、田中伸哉教授、岩永敏彦教授、神谷温之教授、関連分野の教員・大学院生、医学部6年の福田直樹君、武城怜史君、長谷川裕太君、萬翔子さん、5年の佐藤洋祐君、酒泉裕君、4年の今本鉄平君、そしてこれらの企画全般の計画と運営に奔走していただいた鈴木百江係長、安達孝徳さん始め医学科教務担当の皆様に、厚く御礼を申し上げたい。

医学研究科・医学部入試委員会アドミッション実施部会

部 会 長 渡 邉 雅 彦 (解剖発生学分野)

部 会 員 岩 永 敏 彦 (組織細胞学分野)

高 野 廣 子(国際連携室)

田 中 伸 哉 (分子細胞病理学分野)

田 中 真 樹 (認知行動学分野)

大 場 雄 介 (分子細胞病理学分野)

橋 野 聡 (消化器内科学分野)

渥 美 達 也 (免疫・代謝内科学分野)

岩 崎 倫 政 (整形外科学分野)

第7回(平成23年度)

北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金授与式について

今年度で第7回目となる「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金要項」に基づく奨学基金授与式が、去る9月18日(日)に開催された「フラテ祭2011」の第2部フラテ会館落成記念式典において挙行されました。

応募者は17名で、選考の結果、次の11名に奨学金が 授与されました。 • 医学科 3 年 松 本 一 馬

·医学科 4年 佐藤 行真

・医学科 6年 木 内 隆 之

・博士課程2年 鵜川 重和

・博士課程2年 髙田真吾

・博士課程2年 福原淳一

・博士課程3年 菅 野 宏 美

•博士課程3年 佐久嶋 研

・博士課程4年 川 堀 真 人

・博士課程4年 安田耕一

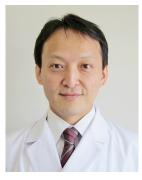
・博士課程4年 丁 献 軍



■教授就任挨拶

「新たなるステージに向かって」

田 中 伸 哉 分子細胞病理学分野(腫瘍病理学分野) 教授



この度平成23年8月1日付けにて、分子細胞病理学分野教授を拝命いたしましたのでご挨拶申しあげます。前任の長嶋和郎教授が退任されましたのは平成16年3月ですので、6年ぶりに第2病理が復活したということになります。平成16年の夏に大学本

部から各部局が人件費5%削減の通達を受けたため10月に第2病理の教授選考委員会は解散となりました。その3年後人件費問題が残ったまま、全国公募の選考の後、腫瘍病理学分野教授を拝命いただいておりましたが、スタッフは教授を含めて2名の限定的な分野でありました。腫瘍病理学分野は実質的には第2病理の全てのハードとソフトを受け継ぎ研究・教育・病理診断を行って参りましたが、この間も分子細胞病理学分野(旧第2病理)は、形式上研究科長が兼担する形で残されておりました。そして本年人件費問題が解決したため、5月に看板だけ残っていた分子細胞病理学分野の教授公募が行われ7月に選出いただいたわけです。この稿の所属が括弧つきで分子細胞病理学分野(腫瘍病理学分野)となっているのは来年度から腫瘍病理学分野という名称に変更する旨が教授会で承認されているためです。

長嶋教授の退任後、3年間は准教授として教室を運営して参りましたが、この間は教室の先行きが全く不透明な状況で困難な状況でしたが、教授会の諸先生方、学内外の多くの先生方にご支援をいただいたおかげで教育・研究・病理診断などの活動を継続してくることができました。この場をおかりして感謝申しあげます。また教室の体制が不安定な時期にもかかわらず、この間多くの若い人達が教室に集まったことも大きなちからの源でした。

第2病理は、北大医学部が設置された3年後の1922年 (大正11年) に東京帝国大学の病理学教室から木下良順 教授が来られて開講されました。木下教授は化学発癌研究がご専門で後に大阪帝国大学へ移られ、最後はロサンゼルス郊外のCity of Hope研究所を創設され、彼の地で永眠されています。第2代の安保壽教授は北大医学部1期生で、大変厳格な教授として知られており医学部長 として昭和天皇のご来学を先導されている写真を記憶されている方も多いと思います。腫瘍病理学分野の教授を拝命した際には長嶋名誉教授とともに小樽の墓前にご報告に行って参りました。第3代の恩村雄太教授は御退官の昭和60年までドイツ語の講義をされた先生として多くの先輩方の記憶に残る教授です。本年卒寿を迎えられ益々ご健在のご様子です。第4代の長嶋和郎教授はトップリサーチを目指しながら多くの若手を育てられ、弟子は学外にも多く京大教授、神戸大教授、国立感染研部長、千葉大准教授など全国で活躍しています。

第2病理のこの四半世紀は、恩村雄太先生、下田晶久 先生、井上和秋先生らが築かれた人体病理学の歴史があ り、それを大切にしながらリサーチを発展させた長嶋時 代があります。現在は基礎研究の成果をいち早く臨床に フィードバックできるよう、トランスレーショナルパソ ロジーの立場でスタッフも若い大学院生も日夜研究、病 理診断に取り組んでいます。現在国内では震災からの復 興、国外では世界同時株安など不安材料が多々あります が、今年国民に希望の光をあたえてくれたくれた事の1 つは、「なでしこジャパンワールドカップ優勝」の快挙 ではないでしょうか。日頃からのたゆまぬ努力と、試合 での粘り強さ、そして少ないチャンスをものにする技術 に裏付けされた勝利を呼びよせる運。これらは分野こそ 違え基礎医学研究に携わるものにもそのままあてはまる 資質・姿勢と思います。第2病理でも個々の選手がそれ ぞれに個性を伸ばしながら、時には連携プレーで、時に は強烈なミドルシュートでゴールを決めることができる よう監督・コーチ・選手一丸となって努力していく所存 ですので、皆様、今後ともご指導よろしくお願い致しま



第二病理のロゴマーク

■大学院教室紹介

「耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野」

福 田 諭 耳鼻咽喉科·頭頸部外科学分野 教授

高 木 大 耳鼻咽喉科·頭頸部外科学分野 助教/医局長



耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教室は、大正11年に開講され来年で90周年を迎える伝統ある教室である。耳鼻咽喉 科・頭頸部外科がカバーする 領域は大変広く、聴く・嗅 ぐ・味わうといった重要な感 覚機能をはじめ、話す・噛 む・飲む・食べるなど日常生

活を営むために必要不可欠な領域を扱っている。そのため、腫瘍、炎症性疾患、先天性奇形、アレルギー・自己免疫疾患を始め、聴覚・平衡・嗅覚・味覚・音声・嚥下・顔面神経などの多彩な疾患を対象に、臨床研究、基礎研究、診療、教育を担っている。北海道大学病院においては、頭頸部、聴覚中耳、前庭、副鼻腔・アレルギー、音声言語、嗅覚・味覚などの各グループに分かれて診療、教育、研究にあたっている。紙面の都合もありこのグループをベースにして紹介していきたい。

この中で頭頸部腫瘍外来は前任の犬山征夫名誉教授以 来教室のメインテーマとなっている「臓器・機能温存を 指向した頭頸部癌の集学的治療」の大きな役割を担って いる外来であり、また1975年頃より続き現行の表現で はまさしく Cancer Board といえる放射線科との合同カン ファレンスも行い、臨床病期や治療方針の決定を複数科 で行っている。治療に関しては、拡大切除再建手術(外 科、脳神経外科、形成外科とのチーム手術)、超選択的 動注化学療法、放射線化学療法(IMRTも導入)を行っ ている。進行癌に対して、遠隔転移の予防、生命予後の 延長を期待して、積極的にNeo-Adjuvant Chemotherapy(導入化学療法)を施行しており現在、腫瘍内科と協力し プロトコール作成中である。また、補助療法としての、 口腔ケア (口腔外科)、PEGの増設 (第3内科)、積極的 な麻薬使用による疼痛管理 (緩和ケアチーム) などを チーム医療として他科の協力のもとに行い、副作用の軽 減や治療の完遂率の向上を目指している。

研究面では、臨床試験としては、口腔癌のT1-2、N0 症例を対象にlate neck metastasisの予防の立場からセンチネルリンパ節生検の検証を厚労省班会議と連動して行っている。基礎研究の分野では、中咽頭癌(特に扁桃癌)のless intensive treatmentに結びつく可能性が報告されているHPV(特にHPV16)の多面的な解析、プロテオミクスによる腫瘍マーカーの開発、抗癌剤耐性機序の解明、ユビキチンリガーゼの分子生物学的解析、半導

体PETの臨床応用、腫瘍の切除断端に関する分子生物学的解析、唾液腺悪性腫瘍の治療標的分子の解析を行っている。こうした成果は、2010年5月当科領域最大の第111回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会の宿題報告で「頭頸部癌治療における分子生物学的アプローチ」として発表した。

教育の観点からは、毎週月曜日の早朝、頭頸部癌に関する勉強会を行っている。個々の症例の治療方針に関する検討や、頭頸部治療に関する最新の論文紹介、国際学会や国内・国外研修の参加報告などで、これまで研修医、若手医師に分かりにくかった治療方針決定までの経緯や考え方、教科書では学びにくい画像診断や手術のコツ、また国内外の最新知見を学ぶことができ、大変有意義な勉強会となっている。

聴覚グループは、聴力改善が乏しい突発性難聴・低音障害型感音難聴・メニエール病に対し鼓室内ステロイド注入療法を積極的に行っており、良好な成績を得ている。BAHA(埋め込み型補聴器)は治験が終了し、音源定位に関する研究を行っており、これらの成果は厚生労働省班会議やシンポジウム・国際学会等で報告している。

音声言語グループは、発声、構音、発達等、コミュニケーションに関する障害を対象として診療を行っている。とくに、最近激増している痙攣性音声障害等の発声行動の異常については、北海道医療大学言語治療室との協調による、音声リハビリテーションと喉頭機能外科がようやく歩調をそろえて動き出したところである。

構音障害の領域をみると、平成3年から行われている 口蓋裂等顎顔面形成異常に関する形成外科との連携は、 現在、北大病院Maxillofacial Unit (MFU) に発展した。 ここでは、形成外科、脳神経外科、歯科等の協調による 形態的、機能的な学際的診療が実現している。



頭頸部癌手術

免疫・アレルギーグループは副鼻腔疾患とウェゲナー 肉芽腫症、反復性多発性軟骨炎、シェーグレン症候群と いった自己免疫疾患を中心に診療し、また激増する鼻ア レルギーの最新治療としての舌下免疫療法にも多施設共 同試験に参画している。

前庭グループは、難治例のBPPVに対してはEpley法を初めとする耳石置換法を積極的に施行している。また VOGによる眼球運動精査を行い、診断や経過観察に役立てている。

卒後研修に関しては将来耳鼻咽喉科・頭頸部外科専門 医を目指す入り口となるので、まずは前述のような科の 特性の下で外来診療および手術を含めた病棟診療をとお して、患者-医師の関係を確立する力、チーム医療、問 題対応能力などを身につけていただくよう研修してい る。また前述のように人間が基本的生活を営むために必 要な器官を扱っているので、これらの障害を有する患者 と接する中で、患者の不自由さを理解し、医療人として の姿勢と態度をあわせて学んでいただいている。研修課 程の最終目標は高度な専門領域を具有する専門医を育て ることであり、研修年度に応じて大学病院・関連病院等 にて臨床トレーニング、更に基礎的・臨床的研究に従事 し、国内外の留学・大学院での研究などでさらに幅広い 知識や考え方を習得するようにしている。日本耳鼻咽喉 科学会認定専門医取得後も、さらに日本気管食道科学会 認定医、日本アレルギー学会専門医、頭頸部癌専門医な どの取得も可能である。最新の検査や治療方法が次々に 開発されている現在、その多数の選択肢の中から患者さ んにベストな治療が選択できるように、日々、知識の集 積や技術の研磨に努めている。

その一方、臨床から出る疑問・課題・問題点をfrom clinic to bench という観点で研究する姿勢も強調していおり、過去3年で大学院生を中心に高桑榮松奨学基金奨励賞を武市先生が、音羽博次奨学基金を加納・真栄田・内田先生の3人が、フラテ研究奨励賞を水町先生が受けている。また過去3年の受賞も、瀧先生が7th International Conference on Head & Neck Cancer (San Francisco, CA,USA) においてPoster of distinction、本間

准教授がInternational Research Promotion Council (IRPC) からWorld Scientists Forum International Awards in Head and Neck Oncology" Eminent scientist of the year 2011 ASIA" を受けている。

現在教室は2013年5月、15年ぶりの北大主催となる 第114回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会開催に向 けても鋭意取り組んでいるところである。

最近3年間のImpact Factor ≥ 3 の論文のうち主な論 文4編を掲載

- Homma A, Oridate N, Suzuki F, Taki S, Asano T, Yoshida D, Onimaru R, Nishioka T, Shirato H, Fukuda S: Superselective High-dose Cisplatin Infusion with Concomitant Radiotherapy in Patients with Advanced Cancer of The Nasal Cavity and Paranasal Sinuses: A Single Institution Experience. Cancer 115: 4705-4714, 2009
- Nakamaru Y, Vuppusetty C, Wada H, Milne JC, Ito M, Rossios C, Elliot M, Hogg J, Kharitonov S, Goto H, Bemis JE, Elliott P, Barnes PJ, Ito K: A protein deacetylase SIRT1 is a negative regulator of metalloproteinase-9. FASEB J 23: 2810-2819, 2009
- 3. Maeda H, Miyajima N, Kano S, Tsukiyama T, Okumura F, Fukuda S, Hatakeyama S: Ubiquitin-Conjugating Enzyme UBE2Q2 Suppresses Cell Proliferation and Is Down-Regulated in Recurrent Head and Neck Cancer. Mol Cancer Res 7: 1553-1562, 2009
- Fujiwara K, Akao T, Kurkin S, Fukushima K: Activity of pursuit-related neurons in Medial Superior Temporal area (MST) during static roll-tilt. Cereb Cortex 21: 155-165, 2011



教室員

各研究のホームページ掲載内容はこちらから http://www.hokudai.ac.jp/?lid=3

脊椎感染症に対する最小侵襲鏡視下手術 ー北海道大学病院にて先進医療認定ー

伊 東 学 北海道大学大学院医学研究科 脊椎・脊髄先端医学講座 特任教授

我が国では高齢者人口の増加や糖尿病患者の増加とともに脊椎感染症が増加しています。脊椎感染症は、時には命を脅かす重篤な感染症です。感受性のある抗生物質の投与や、感染部を外科手術で摘出するなどの治療がおこなわれていますが、抗生物質の投与のみでは治癒まで長期間かかり治療の確実性が低いこと、また、従来から行われている一般的な脊椎手術は侵襲が大きく、体力のない高齢者や全身合併症のある症例では周術期管理が困難であるなどの問題がありました。

本治療法は、1cm程度の小さな傷から脊椎用内視鏡を 挿入し、椎体・椎間板の感染で汚染された組織や膿瘍を 除去・新鮮化し、周囲組織からの血流を誘導します。そ れにより、抗生物質の感染巣内への組織移行性を高め、 感染治癒を促進することができます。局所麻酔と静脈麻 酔を併用し、覚醒下に手術操作を行うことができるため、手術操作中常時神経組織への負担をモニタリングす ることが可能である利点があります。また、40分程度 で治療を終了する低侵襲手術であるため、全身予備能が 低下した症例でも安全に治療が可能となりました。適応 となる起炎菌は、化膿性菌、結核菌、非結核性抗酸菌、 真菌など、椎体・椎間板の感染を起こす菌全般です。

脊椎感染症は高度な痛みと発熱を伴いますが、本治療直後から痛みは著減します。また、黄色ブドウ球菌などの一般的化膿性菌の場合には、術後2週程度で炎症所

見が陰性化する結果が得られております。本手術治療は2001年3月から北海道大学病院で開始し、これまで100例近い臨床実績があります。その実績が認められ、脊椎感染症に対する最小侵襲手術として、本年6月24日に先進医療として厚生労働省から認可を受けました。脊椎感染症の手術治療として、国内で先進医療として認可されたのは本手法が初めてです。患者の自己負担額は22万3200円、保険外併用療養費は52万3000円となっています。

本治療法を実施する上で、多くの先生方のご協力とご 指導をいただきました。手術治療導入と確立のためにご 指導をいただいた三浪明男整形外科教授、鐙邦芳体幹支 持再建医学教授、本手技に適した麻酔方法についてご指 導くださった森本裕二侵襲制御医学教授、個々の症例で 適切な抗菌剤選択をご指導くださった石黒信久感染制御 部副部長の各先生に深謝いたします。



左右の腰部から内視鏡を挿入し脊椎感染巣の掻爬洗浄を 低侵襲で行います

(研究発表プレスリリース掲載日 2011.8.8)

医学研究科・医学部の受賞関係リスト

医学研究科・医学部より受賞されました。 平成23年5月末から7月末までを掲載します。

- 1. 2011/07/28 伊藤陽一准教授(臨床統計学分野) SASユーザー総会 2011 最優秀賞受賞 (研究題目:マイクロアレイデータによる予後予測 モデル構築における.632+推定量によるエラー率の 補正とROC曲線解析)
- 2. 2011/07/28 那須裕也氏(博士課程学生、消化器外科学分野 II)

日本膵臓学会奨励賞受賞

(研究題目:腹腔動脈合併尾側膵切除術後2年間良好なQOLを維持できた局所進行膵体部癌の1例)

- 3. 2011/06/30 笠松純研究員(免疫学分野)第22回日本生体防御学会奨励賞受賞(研究題目: ヤツメウナギにおける第3のVLR の同定)
- 4. 2011/06/09 那須裕也氏(博士課程学生、消化器外科学分野 II)

日本肝胆膵外科学会理事長賞受賞

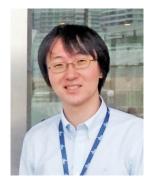
(研究題目:肝門浸潤進行胆嚢癌の外科治療—肝門 部胆管癌との比較—)

5. 2011/05/25 押海裕之講師(免疫学分野)第76回日本インターフェロン・サイトカイン学会 奨励賞受賞

(研究題目: The Ubiquitin Ligase Riplet Is Essential for RIG-I-Dependent Innate Immune Responses to RNA Virus Infection)

学生の見たマッチング、研修病院選び

福田直樹医学科6年



医学生の"就活"を左右する大きな制度であるマッチング制度であるが、筆者自身も実際に6年次になるまではその実態をよく把握していなかったというのが本音であり、若い学生あるいはマッチング制度開始以前に研修を終えたDr. らには完全に膾炙しているとは言い難い。ここで

はまず簡単にマッチング制度について記載したい。

医師臨床研修マッチング(=組み合わせ決定)とは、臨床研修を希望する医学生と、その医学生を研修医として採用する研修病院両者の希望を事前に登録し、プログラムされた一定の規則に従ってその組み合わせを決定するものである。2004年に新臨床研修医制度がスタートするのに合わせ、先立つ形で2003年より開始された。

医学生のいわゆる"就活"の流れとしては、まず病院 見学から始まる。主に夏休みなどの長期休暇を利用し て、実際に病院に赴き、院内の見学や実習を行うもので ある。どの病院に見学に行くかは、病院のブランドも勿 論参考になるが、先輩や同期の学生による口コミが最も 重要な情報となっている。開始時期は医学生の判断に 委ねられており、早い学生では2年次や3年次から見学 に行く学生もいるが、5年次、6年次に自分の進路が朧 げに見え始めてからという学生が最も多い。その上で、 6年次の夏(7月~9月頃)に各病院の採用試験を受け る。採用試験は病院によって千差万別で、筆記試験、面 接、小論文などのオーソドックスものから、インフォー ムド・コンセントを模擬的に行わせるなどのユニークな 実技試験を課す病院もある。新臨床研修医制度の開始に より学生に病院選択の自由が広がったことで、個々の病 院が採用したい学生の像をより明確に打ち出せるように なった結果と言えるのかもしれない。

採用試験を受けたのちに、9月には実際にマッチングの登録が開始されるが、これ以降の作業は全てインターネット上で、医師臨床研修マッチング協議会のホームページにログインして行う。医学生側は自分が研修を希望する病院をその希望の順に指定し、逆に研修病院は自分が採用したい順に学生を並べ、コンピューターによりこれらを照らし合わせ、両者が「マッチ」していれば決定となる。一方、マッチしなかった(「アンマッチ」となった)学生は、二次募集をかけている病院などに応募する必要がある。現実的には、倍率が3倍を超えるような、いわゆる超有名ブランド病院を除けば、余程のことがない限りはマッチするようになるようだ。実際にこの方法により、全参加者のおよそ80%以上の研修先が決定しており、卒業試験や国家試験を控えた学生の時間を必要以上に拘束することもないことから、効果的なシステムであると言える。

医学生の研修病院選びについても記しておきたい。前

述のように、先輩や同期らの口コミをもとに、5年次、6 年次に説明会や見学に参加することになる。病院選びの 基準としては、研修プログラム、指導医、手技、当直、 給与、立地条件などが考えられる。同期を見ている限り、 多くの学生が指導体制の充実していること、実際に手技 を多くやらせてもらえること、を重視しているように感じ られる。やはり医師1、2年目に出来るだけ多くの基礎的 かつ実践的な知識、技術を身に付けたいと言うのが多く の学生の本音のようである。逆に、1、2年目の給与や立 地条件については、多少の影響程度に留まっているよう に見受けられる。多少の都市圏から離れていても、指導 体制がしっかりしていると評判の病院は、やはり人気が 高い。また、3年目以降の志望科が確定していない学生に とっては、初期研修の2年で多くの科を回り、進路決定に 役立てたいという思いがあるようである。他方、志望科が ほぼ確定している学生では、その科を重点的に回りたい、 という意見と、初期研修の間しか他科は回れないのだか ら他の科を見ておきたい、という意見の両方が見られる。

本学においては、1、2年目にはより基礎的、実践的な 実習がしたい、かつcommon diseaseを診たい、学生たち の意識の結果、初期研修を外病院で2年、或いは「たすき がけ」(2年のうち1年を外病院、1年を大学病院で研修す る)を選択し、その後専門に入るべく大学病院や市中病 院で後期研修を行うという青写真を描いている学生が多 い。そういった希望に合わせて、common diseaseを診る ためのプログラムや外科のプログラムが新設されるなど、 大学側も色々な対応を練っている。筆者は他大学の採用 試験も受験したが、北大病院の研修プログラムの自由度 の高さは、他大学と比較してもかなり高いように感じられ た。学生の声が必ずしも正しいかどうかはともかく、声が 届きやすい環境が作られつつあるのは間違い無いだろう。

ここまでマッチング、研修病院選びについて書いてき たが、筆者としては、初期研修の2年は医師としてのス タートと言う意味で極めて重要であることを認識しつつ も、どこで研修するかではなく、行った研修先で最大限 の努力をすることのほうが重要であると考える。第一希 望の病院にマッチせず希望病院以外に行くことになった が、研修を終えてみると非常に良い研修であったという 話は、実際に良く先輩から耳にする。勿論、学生の考え る初期研修のイメージと、実際の医療現場、医学教育の 現場の実情には乖離があることも多いだろう。また、2 年間の研修で出会う人、物などによって、その後の志望 が変化することも大いにあるだろう。しかしながら、多 くの医学生にとって、各病院の採用試験やマッチングは、 初めて出る社会へのある種入り口であり、その際に進路 で頭を悩ませたこと、自分の6年間を振り返ったことな どは、少なからず将来の糧になるはずである。丁度この 原稿を執筆している翌々日、マッチングの中間発表があ り、2週間後には最終決定が控えている。自分の中では、 卒後の進路は決まっているつもりであるが、結果的にど のような進路になろうとも、その時の自分の選択に後悔 しないようにありたい。そのためにも、まずは国家試験 に向けて、もう一度気合を入れ直し、努力していきたい。

第54回東日本医科学生総合体育大会

平尾高行医学科3年

第54回東日本医科学生総合体育大会の夏季部門がこの八月に行われたので、その開催までの様子と結果を報告をさせていただきます。

東日本大震災により、東北地方の一部の大学の部活が難しいこと、電力消費の自粛などを考慮して、開催自体の是非から検討された東医体でしたが、主管校である聖マリアンナ医科大学、筑波大学医学群、昭和大学医学部、東京医科歯科大学医学部の運営役員の方々を中心に東日本の各大学の部活動員、評議委員が開催に向け尽力し、また各大学の先生方の多大なるご助力をいただき、無事開催することができました。特に室内競技は、地震に伴った電力消費節約の必要性と、近年増加している熱中症対策として冷房装置の使用の必要性のバランスを考えなければならなく、評議会、理事会にて慎重に議論が行われました。

そうした中で行われた今回の第54回東医体でしたが、 大きな問題もなく、無事に終わることができました。以下 に各競技の優勝と準優勝、また北海道大学の部活のうち良 い成績を収められた部活の成績を報告したいと思います。

<東医体報告>

- ・ハンドボール競技1位 東京大学 2位 山梨大学
- ・ボート競技1位 山梨大学 2位 慶應義塾大学
- ・剣道競技 男子団体 1位 昭和大学 2位 秋田大学 女子団体 1位 群馬大学 2位 秋田大学
- ・ラグビー競技1位 弘前大学 2位 千葉大学
- ・バレーボール競技男子 1位 慶應義塾大学 2位 自治医科大学女子 1位 防衛医科大学 2位 秋田大学
- ・硬式テニス競技男子 1位 慶應義塾大学 2位 東北大学女子 1位 福島県立医科大学 2位 筑波大学



硬式テニス部

ソフトテニス競技

男子 1位 群馬大学 2位 東京医科大学 女子 1位 福島県立医科大学 2位 北海道大学

・ヨット競技1位 横浜市立大学 2位 順天堂大学

・準硬式野球競技 1位 山形大学 2位 新潟大学

・サッカー競技1位 新潟大学 2位 札幌医科大学

・バスケットボール競技1位 新潟大学 2位 東邦大学1位 筑波大学 2位 東京女子医科大学

・卓球競技 男子 1位 千葉大学 2位 群馬大学 女子 1位 東京女子医科大学 2位 秋田大学

・水泳競技男子 1位 慶應義塾大学 2位 東北大学女子 1位 山形大学 2位 秋田大学

・硬式野球競技1位 獨協医科大学 2位 日本医科大学

·馬術競技 総合成績 1位 昭和大学 2位 慶應義塾大学 第一競技(馬場馬術団体戦) 1位 昭和大学 第二競技(障碍飛越個人戦) 1位 信州大学 第三競技(障碍飛越団体戦) 1位 慶應義塾大学

・弓道競技1位 東北大学 2位 新潟大学

・バドミントン競技男子 1位 筑波大学 2位 東北大学女子 1位 弘前大学 2位 岩手医科大学

<北海道大学の東医体結果報告>

バスケットボール競技 ベスト8 卓球競技 8位 バドミントン競技 6位



ソフトテニス部

高校生メディカル講座:小樽潮陵高校編

渥 美 達 也 内科学講座免疫·代謝内科学分野 准教授

2011年9月8日(木)の午後、私の母校である小樽潮陵高校において、高校生メディカル講座の講師として招聘いただきました。この講義は、大学教育の現場にいる私たちが出身高校にもどって、高校生や中学生を対象に「医学」や「医療」に興味をもってもらえるようにすること、そして北海道から道内の医学部への進学を促進することが目的です。

同様の目的で、3年前にも「出前講義」として小樽潮 陵高校でお話をする機会をいただきましたので、私と しては2回目のミッションとなりました。前回は、内科 学・病理学入門、というタイトルを主催側からいただい たので、私の専門分野であるリウマチ膠原病学と、内科 医や病理医の業務について紹介した程度でした。今回も 軽い気持ちで講義を準備するつもりでしたが、ほどなく 潮陵高校の進路指導担当の住山教頭から連絡があり、以 下の内容の講義を生徒が希望している、ということでし た。すなわち、①都市の病院と地方病院の望ましい分担 と連携、②北海道の救急医療の現状と対応策、という高 校生からの質問として理解しやすいものもありました が、③地方の中核病院の医師確保の現状とその対策(医 師は増えているはずなのに、地方病院の閉鎖・診療日・ 診療科の削減が増えている)、という小樽市がかかえて いる切実な問題点、そして、④地域医療のIT化の現状 と問題点(遠隔地の医療とインターネットの活用:あま り進んでいないように思われるのでその理由)、⑤現在 の電子カルテの利用とその管理について、のような極め てspecificなものまであり、これはかなり本気で準備を しなければ、と決心して取材をはじめた次第です。私は 4年ほど北大病院の電子カルテワーキンググループ長を 担当しておりますが、それを潮陵高校生が知るはずもな く、⑤のような質問が高校生からでること自体がまった く想定外でした…。

当日、小樽潮陵高校に着くと、7人の中学生を含む63人もの生徒達が私を待っておりました。そのうち医学部進学希望者が20人ほど、ということです。小野章校長の紹介で私が登壇し、医学部での学生生活、卒業後の進路、専門医教育や大学院教育の現状、医師や医学研究者の業務や生活についてひととおり紹介し、質問に対応すべくカルテの歴史についてお話をしました。ちなみに、明治時代は、カルテは患者毎ではなく、診療日毎にまとめられ、いまの「当直日誌」のようになっていたそうです。今回の講義の準備段階ではじめて知りましたが、それでどうやって診療したのか甚だ不思議です。生徒達は熱心に私の拙い話をきいてくれ、講義のあとは様々な質問を投げかけてくれました。

私の出身地である小樽市は、街角に多くのひとをみか

けますが、とくに若者はそのほとんどが観光客であり、 実際のところ深刻な人口減、高齢化がすすんでいます。 私の通っていた住吉中学校は生徒減のため数年前に廃校 となり、潮陵高校も30年前から比べて生徒数が半数近 くに減っていました。そんな中で、メディカル講座の当 日は上記のように多くの生徒が参加し、後述するような 感想を述べてくれました。私の使命の一部は全うできた と思っています。そして、ひとりでも多くの小樽の後輩 が北海道大学医学部に学びに来ていただけることを強く 願っております。

生徒から寄せられた感想の一部をご紹介いたします

- ・医学の発展はめざましい、わずかな期間で医療がもの すごく進歩しているということがあらためてわかりま した。電子カルテがもっと普及し、医療システムがよ り良いものになればいいと思いました。
- ・どのような心構えで取り組めばよいかなど医師になる ために必要なことがわかってよかったです。今回の講 座を受講し、より医学科に進学したと思いました。
- ・医師だけでなく研究者としてのことも学べたのでよ かったです。麻酔科に進みたいと思っていましたが、 研究者にも魅力を感じました。
- ・抱いていた医療に関する疑問が氷解できてよかったです。 北海道大学では自分のやりたいことがよりできると わかったので、今後の進路にも大変参考になりました。
- ・文理選択に迷いがあるのでこの講義はとても参考になりました。苦手な教科科目にも一生懸命取り組んで医学系を目指したいと思いました。
- ・この講義を聴き、国内ではなく国外で活躍してみたい と思いました。将来世界を駆けまわる医師になりたい ので頑張りたいです。





高校生メディカル講座を担当して

佐々木 秀 直 神経内科学分野 教授



高校生メディカル講座は、 北海道内の高校生から、少 しでも多くの優秀な高校生が 道内医育大学に進学して、卒 業後は母校の教育研究はもと より道内地域医療に貢献して 欲しいとの願いを込めて「地 域医療を支える人づくりプロ ジェクト事業」として始まっ

た企画である。平成23年9月28日に、この講座が岩見 沢東高校で開催された。同校は"岩東"として、あるい は"旧岩中"としても知られる南空知地区の医進類型指 定校であり、長い伝統を誇る公立高校である。私は昭和 47年3月に、この岩東を卒業した。当時の校舎は昭和24 年の火災後に再建された木造二階建て校舎であった。そ の校舎は、卒後まもなく、現国道12号線バイパス建設 に伴い取り壊されてしまった。昭和51年に現在の東山 地区に移転したので、記憶に残るのは、職員室に掲示さ れている歴代校長の写真の中にお世話になった御二人の 先生を見つけたことと、かの有名な標語「敬天愛人」と 墨書された金箔の壁掛けのみであった。

メディカル講座の講師は母校卒業者との方針なので、 私が岩東での講義を担当するのは今年で2回目である。 初回は新聞社の取材があり、先生の参加も多かったので 随分と緊張した。今回は雰囲気が変わり、医療分野を志 す学生35余名と引率の先生のみの、静かな中にも真摯 な眼差しの集まる講座となった。講演の第一部は「今日 の医療の問題と課題」、第二部は「医学の発展に貢献し た先人に学ぶ」である。第一部では、集まった高校生の 選択肢の幅を考慮して、医療を支える職業、医療に必要 な心構えと医療には不向きな人、医療職で求められるも の、などを冒頭に取り挙げた。次いで、日本の人口構成 と高齢者の増加に伴う疾病構造の変化、慢性疾患の増 加、介護の問題、予防医学の重要性など取り挙げた。医 療の質の高度化、それに伴い地方でも都会でも同質の医 療が要求されること、共同体の互助制度として始まった 健康保険制度のこと、患者の権利意識の変化など、医療 全体の状況を地方と都会を対比させて見えてくる今日の 課題の数々、地方と大学医学部で起きていることの現状 などを紹介した。列挙した課題はどれをとっても、医療 関係者の職業倫理感と責任感のみでは解決が難しく社会 や行政の対応を要する問題である。より直接的な問題と して、高卒後に大学進学を目指す目標と意義、高校と大 学の違い、卒業には資格試験のあることなどを述べた。 職業として医療を目指すには、それぞれの職に国家試験 があるからである。

第二部では医療は総合科学の応用であること、特に医 学部を受験する際に勉強してほしいこと、などから始 め、近代医学の発達に貢献した人々を紹介した。その例 としては、日本人としては志賀 潔、北里柴三郎、野口 英世、高木兼寛の諸氏、外国からはローベルト コッホ、 ルイ パスツール、アルベルト シュバイツァーの諸氏 を取りあげた。母校である岩中の出身者からは、日本で 初めて脳神経外科を北大に開設した都留美都雄先生を紹 介させて頂いた。最後に、素養として高校時代の勉強の 大切さを協調させて頂いた。これは診療の過程で対峙す る人を理解する上で欠かせないものがあると考えている からである。私自身は、明治や大正生まれの患者さんに、 歴史的な体験談を伺う機会が多かった。講演では、学生 から事前に質問事項も寄せられたので回答と解説も行っ た。質問の例として、何故病気には子供が罹り易い病気 と大人が罹り易い病気があるのか、遺伝性の病気を未然 に防ぐ方法は有るのか、医学部を受験する際に勉強して おくべきこと、などがあった。さらに、講義の後に質問 が多数寄せられた。医学部進学を目指す学生からは、地 方の病院で質の高い卒後研修は出来るのかなどの具体的 な質問をはじめ、あるいは本質的な問題に結びつく難し い質問も多かった。引率された先生からも御発言を頂 き、共に楽しく討論させて頂いた。

講義の内容と回答は、分かりやすく率直なものとするように配慮したのであるが、取り挙げた話題は個人的な興味や価値観による部分も多かったので偏った内容となったことを危惧している。終了後に、いつもとは違う内容で盛り上がりました・・・との感想を頂いたが、過ぎた点をご容赦頂ければ幸いである。後日、生徒の感想文を拝見する機会を頂いたが、講演の意図は大凡伝わっていたようなので安堵した。これを機会に母校から少しでも多くの学生が医療関係の大学や専門学校に進学して、将来の後継者として育ってくれることを願っている。私見ではあるが、"先生"と呼ばれる職種の中で人の心に終生残り、その呼称に最も相応しいのはなんと言っても高校の教師であろう。これからも、誇りを持って日本を支える人材を育てほしい。母校の先生の地道な努力に期待したい。

最後に、準備を担当された岩見沢東高校の進路指導部 長 橋村正悟郎先生はじめ関係者の皆様に、母校での講 演の機会を与えて頂き感謝致します。

平成23年度 医学研究科・医学部教育ワークショップ (フルFD) 開催

吉 岡 充 弘 医学教育推進センター副センター長

今年度から、FDを目的別に複数回実施することとなり、これまで行ってきた宿泊型のFDに加え、講義・演習の半日形式FDを実施することとしました。これにより、14回に渡り実施してきこれまでのFDを、センターでは<フルFD>と呼び、半日形式FDと区別することにしました。FD参加機会を多く設定する背景には、多忙さを極める大学教員の負担増を出来るだけ押さえつつ、教員の意識改革やレベルの向上に資するものとしてFDを位置づけている医学研究科の方針があるといえます。

今回は「学生参加型授業の実際とその導入」をテーマに、8月19日~20日に渡り、奈井江町農業構造改善センターにて実施されました。参加者は事務方からも松本総務課長補佐、菅田大学院教務担当係長の支援を受け、総勢40名の規模となりました。

ワークショップはまず、玉木長良研究科長の挨拶から 始まり、アイスブレーキングとして今野、志馬両教育助 教によって「カレーへのこだわりは?」について各人の とっておきのレシピが紹介され、ワークショップの雰囲 気を和ませていきました。

午前中は「参加型授業を作る」というテーマで、まず 川畑タスクフォースにより講義がなされました。その 後、参加者は4グループに分かれ、作業が開始されまし た。「医療面接」「EBM治療」「医学概論」「腎腫瘍の病 理組織」という科目名でそれぞれのグループは科目設計 を行い、その実施方法のみならず評価方法まで議論がな されました。

午後には、〈授業応答システム「クリッカーによる能動的学習授業」〉というタイトルで、本学高等教育推進機構の山田邦雄特任准教授により講演がなされました。クリッカーとはARS(オーディエンス・レスポンス・システム)のひとつで、リモコン、レシーバおよびソフトウエアからなるシステムであり、リアルタイムに学生の反応をフィードバックできるものです。各参加者にリモコンが手渡され、実際の使用例についての体験学習も用意されました。質問(クイズ等)はパワーポイント上でのテンプレートに入力するだけで作成でき、学生にリモコンのスイッチを押させ、今まさに教えた項目についての理解度を知ることができるのです。Excel上に解答結果を書き出すこともでき、評価や出席確認にも使用できるシステムでした。

参加者はタイトなスケジュールをこなし、夕食後にもディベート付きの懇親会が開催されました。加藤タスクフォースの司会により、「学生の教員評価には妥当性があるか?」をテーマに熱いディベートがなされ、小児科学の白石助教からの説得力ある発言に審査員(玉木研究科長、秋田教務委員会委員長ら)は<妥当性がない>

チームを勝ちと判定しました。

2日目は、「チーム基盤型学習」について小華和タスクフォースにより、講義がなされ、学生参加型授業についての一例が紹介され、それらの限界や問題点について討論がなされました。最後に、秋田教務委員会委員長から感想等が述べられ、2日に渡るフルFDは終了しました。

今年度からFDは医学教育推進センターの教育企画実施委員会が立案・実施を担うことになり、本委員会で目的や方法について議論を深めてきました。医学教育初心者のための「カリキュラムの構造と設計」にテーマを絞った<ミニFD>を春に、今回のような実際に医学教育を実践し、問題等を抱えている中堅教員のための<フルFD>を夏に、大学院教育に特化したテーマを設定した<ミニFD>を秋に、そして教授・助教授を主な対象に、医学教育システムや医師国家試験等の国策にテーマを絞った<ミニFD>を行っていきたいと考えています。

今後は、FDといえども<成人教育>の一貫としてとらえ、参加目的を明確に提示しつつ、環境アメニティーの整った施設での実施を計画しています。医学教育の一翼を担うものとして、医学部・医学研究科教員集団のレベル向上へ資するFD実施にご理解とご協力をお願いいたします。





医学研究科・歯学研究科合同慰霊式を挙行

医学研究科及び歯学研究科では、9月28日(水)午後1時30分からクラーク会館講堂において、この1年間医学・歯学の教育・研究・診療のため尊い御遺体を捧げられた236名の御霊の御冥福をお祈りする慰霊式を執り行いました。

慰霊式には、御遺族、来賓、総長、理事、関係部局長、教職員、学生等約420名が参列しました。

式は解剖体御芳名奉読の後、参列者全員による黙祷を行い、次いで、玉木医学研究科長及び鈴木歯学研究科長から御霊の御意志に報いるためにも一層の教育・研究・診療の発展に努めたい旨の追悼の辞を申し上げました。その後、参列者による献花を行い、最後に玉木医学研究科長から謝辞があり、慰霊式は厳粛のうちに終了しました。



追悼の辞を述べる鈴木歯学研究科長



謝辞を述べる玉木医学研究科長



献花をする総長

動物慰霊式を挙行

医学研究科附属動物実験施設では、9月8日(木)午後4時から、平成23年度動物慰霊式を動物実験施設動物慰霊碑前において執り行いました。慰霊式は、医学並びに生命医科学の教育研究のために多数の動物の尊い生命が犠牲になっていることを厳粛に受け止め、動物の霊を追悼するとともに、生命の尊厳と倫理感を啓発することを目的に実施されているもので、教職員、大学院生、学部学生及び研究生等関係者約200人が参列しました。

はじめに畠山施設長から追悼の辞が述べられた後、白土副研究科長から挨拶があり、その後、参列者全員による黙とう並びに献花が行われました。最後に畠山施設長から適正な動物実験実施へ向けてのいっそうの理解と協力を願う旨の挨拶があり、厳粛のうちに慰霊式を終了しました。



挨拶を述べる畠山施設長



献花をする白土副研究科長

陽子線治療研究施設新営工事の状況について

岩 佐 俊 明 最先端研究開発事業支援室 総務課課長補佐

本研究科・白土博樹教授を中心研究者とする国家プロジェクト「最先端研究開発支援プログラム」では、画期的な陽子線がん治療装置「分子追跡陽子線治療装置」の開発を進めており、現在、北海道大学病院敷地内の一画に、当該治療装置を用い陽子線がん治療を行うための建屋「陽子線治療研究施設」の建設工事が行われています。

建屋は地上4階建となっており、1階部分に陽子線を生成・加速・照射する装置類が設置され、診察室や治療室もこの階にあります。また、病院内からのアクセスを考慮して、既設の渡り廊下と接続した2階部分に受付と患者待合を設けることとしています。

3階と4階は、主に医療スタッフや研究者用の居室と施設全体を維持・管理するための設備等エリアとなっています。

工事は、8~9月はコンクリート杭の施工、10月からは基礎躯体工事、翌年5月中旬頃の上棟を経て、建屋としての完成は平成25年3月を予定していますが、実際にがん治療が行えるようになるのは、上記プロジェクトの研究期間を終える平成26年3月以降、陽子線治療装置が完成した後、はじめて北大病院の新施設として運用可能となります。

本施設の特徴は、治療装置自体が最先端技術を集結し小型化を図った新型モデルであり、その建屋も既存の陽子線治療施設と比べてとりわけコンパクトな設計となっているため、建設コストや維持費を大幅に抑え、大学病院や都市型のがん拠点病院など比較的狭い場所でも導入可能なベースモデルとして、世界的な普及も見据えています。

また、本施設は、北海道大学病院の最先端がん医療施設という位置付けのみならず、札幌市ひいては北海道におけるがん治療の拠点として、地域の活性化と発展につながるものと期待されていますが、施設の完成と装置開発にはまだまだ相当な期間を要します。

皆様方におかれましては、今後の工事及びプロジェクトの推進につきまして、引き続きご理解とご支援をいた だけますよう、お願い申し上げます。

平成23年度 医学研究科・医学部医学科「優秀研究賞」、「優秀教育賞」、 「優秀論文賞」及び「特別賞」受賞候補者の推薦について

医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰に関する内規に基づく、平成23年度各賞(優秀研究賞、優秀教育賞、優秀論文賞、特別賞)受賞候補者の推薦を平成24年1月4日(水)~平成24年1月31日(火)の期間受け付けます。(優秀研究賞、優秀教育賞及び優秀論文賞は、自薦も可)

なお、平成22年度から優秀論文賞の選考基準が最近5年の平均インパクトファクター10.0以上となりましたので、多数の応募をお待ちしております。

○賞の種類及び対象

- (1)優秀研究賞:顕著な研究業績をあげた専任教職員
- (2)優秀教育賞:顕著な教育業績をあげた専任教職員
- (3)優秀論文賞:特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等
- (4) 特 別 賞:医学研究科、国内又は国際社会に顕著な貢献をした専任教職員・同窓生
- ○提出書類:受賞候補者推薦書及び候補者調書
- ○推薦書等の提出先:医学系事務部総務課庶務担当
- ○受賞候補者推薦書・候補者調書の請求先: E-mail: shomu@med.hokudai.ac.jp

平成23年度 医学部医学科学士編入学 (第2年次第2学期) 試験結果について

平成23年度医学部医学科学士編入学(第2年次第2学期)試験(募集人員5人)について、7月23日(土)第1次選抜試験、8月18日(木)実施の第2次選抜試験を経て、8月26日(金)に最終合格者5人を発表いたしました。

入試データ

志	願	者	350人(男224人、女126人)
第1%	火選抜受	験者	319人 (男205人、女114人)
第1%	火選抜合	格者	30人 (男 24人、女 6人)
第2岁	火選抜受	験者	28人 (男 22人、女 6人)
最糸	冬 合 格	子者	5人(男 5人、女 0人)

第106回医師国家試験について

来年2月に実施される第106回医師国家試験の日程が7月1日付けの官報により次のとおり公表されました。

出願期間	平成23年11月14日(月)~12月2日(金)			
試験日	平成24年2月11日(土)・12日(日)・13日(月)			
合格発表	平成24年3月19日(月)午後2時			

なお、願書等の書類の提出については、北海道厚生局からの要請により、卒業見込み者については、 医学科教務担当で願書等取りまとめ、一括して提出 することになっております。具体的な日程・方法等 については、決定次第お知らせいたしますが、受験 予定者にあっては提出期限の厳守等、ご協力をお願 いします。

平成24年度 大学院入学試験について

去る、8月31日 (水) に修士課程ならびに博士課程(前期)の入学試験が実施され、9月16日(金)にそれぞれ合格者が発表されました。

各課程の志願者・受験者・合格者は次のとおりです。

課程区分	修士課程	博士課程(前期)	博士課程(MD-PhD特別選抜)
志 願 者	19名 (男 8名、女11名)	22名 (男14名、女 8名)	1名 (男 1名、女 0名)
受 験 者	18名 (男 8名、女10名)	21名 (男14名、女7名)	1名 (男 1名、女 0名)
合格 者	18名 (男 8名、女10名)	19名 (男14名、女 5名)	1名 (男 1名、女 0名)

修士課程の第2次募集及び既に公表している博士課程(後期)募集日程は、次のとおりです。

事	項	_	課	程	修士課程(第2次募集)	博士課程(後期)		
出願資格審査申請期間			申請期	期間	平成23年11月8日 (火)~11月14日 (月)			
入	入 試 説 明 会			会	平成23年12月4日(日)13:00~			
出	願		期	間	平成23年12月6日(火)~12月12日(月)	平成23年11月29日(火)~12月5日(月)		
試	試 験 日			日	平成24年1月	平成24年1月18日 (水)		
合	格	発	表	日	平成24年2月3日(金)			

平成23年度 財団等の研究助成採択状況

財団法人等名	種別	研究者名	交付金
財団法人 平和中島財団	国際学術研究助成	森松 組子	2,000,000
	研究助成	秋田 弘俊	2,000,000
財団法人 喫煙科学研究財団		三輪 聡一	2,000,000
		吉岡 充弘	2,500,000
財団法人 杉野目記念会	海外学識者講演会開催助成	本間 さと	50,000
財団法人 医用原子力技術研究振興財団	医用原子力技術に関する研究助成	宮本 直樹	1,000,000
		渡邉 雅彦	1,000,000
	研究助成 (一般)	増渕 悟	1,000,000
財団法人 秋山記念生命科学振興財団		西屋 禎	1,000,000
	研究助成(奨励)	志馬 寛明	500,000
	柳先切成(突励)	大村 優	500,000
		大西 俊介	200,000
	交流助成	重村 雅彦	200,000
 財団法人 伊藤医薬学術交流財団		山仲 勇二郎	250,000
州団伝人 伊藤医架子州交加州団		シャロンハンリー	250,000
	学会等助成	吉岡 充弘	400,000
	子云寺切成	本間 さと	400,000
	医学系研究奨励 (臨床)	須藤 英毅	3,000,000
	生命科学研究助成	瀬谷 司	10,000,000
公益財団法人 武田科学振興財団	医学系研究奨励 (基礎)	西屋 禎	3,000,000
	医学系研究奨励(精神・神経・脳領域)	田中 真樹	3,000,000
	医学系研究奨励 (生活習慣病)	神田 敦宏	3,000,000
財団法人 高齢者眼疾患研究財団	高齢者眼疾患研究費助成	野田 航介	1,000,000
公益財団法人 森永奉仕会	研究奨励金	小林 一郎	600,000
公益信託 三島済一記念眼科研究国際交流基金	研究助成	神田 敦宏	1,000,000
財団法人 中山科学振興財団	研究助成	平田 快洋	1,000,000
財団法人 金原一郎記念医学医療振興財団	基礎医学医療研究助成	平田 快洋	400,000
对自四八 亚州 种品心色于色赤城类别目	基礎医学医療研究助成	大西 俊介	500,000

平成23年9月30日までの採択判明分

平成23年度 科学研究費補助金採択状況

単位:千円

					+ 17 · 1 1 1
研究種目	新規申請	継続申請	交付内定 (採択)	平成23年度交付決定	
	件数	件 数	件 数	件 数	交付金額
特別推進研究	0	0	0	0	0
特定領域研究	0	2	2	2	9,600
新学術領域研究 (領域提案型)	21	3	7	6	108,420
新学術領域研究 (課題提案型)		1	1	1	10,010
基盤研究(S)	3	1	1	1	19,110
基盤研究 (A)	4	5	7	7	98,540
基盤研究 (B)	21	15	25	24	141,180
基盤研究 (C)	43	35	55	55	88,660
挑戦的萌芽研究	26	6	18	16	29,510
若手研究 (S)		0	0	0	0
若手研究 (A)	0	0	0	0	0
若手研究(B)	40	14	33	30	62,790
研究活動スタート支援	11	1	5	5	13,447
合 計	169	83	154	147	581,267

※新学術領域研究(研究課題提案型)及び若手研究(S)は、新規申請の受付停止。

※交付内定は申請に対する採択のため、平成23年4月1日までの医学研究科の研究者の転入出を含まない。

※交付決定は平成23年9月1日までの医学研究科の研究者の転入出を反映させた数字

※採択率 (新規・継続を含む) 152÷252=60.3%

※平成23年9月1日現在

広報室便り19 ---

北海道大学医学部創立90周年記念事業「北大医学部90年史」が、ついに発行されました。年史の編纂を支援してきた広報室の関連メンバーは、肩の荷が下りてホッとしているようです。大変お疲れ様でした。内容は極めて充実しており、歴史に残る優れた「年史」として、後世に読み継がれるでしょう(広報室にも揃えてあります)。

ところで、実は、今皆さんが読んでいる「広報」の発行は編集委員と総務課庶務担当の努力で10年以上前から続いており、「年史」を書く時にもとても役立ったと聞いております。「広報」はホームページでも第一号からPDFファイルで見ることができます。今後とも、「広報」もホームページも、ごひいきに。

(広報室長 白土 博樹)

編集後記一

医学研究科・医学部医学科広報第49号をお届け します。多忙な中原稿をお寄せ下さいました皆様に 感謝申し上げます。

新しい動きとしては、「高校生メディカル講座」があります。「オープンキャンパス」は、参加希望者の方々に大学に来ていただいて行われる交流行事ですが、これに対して、「高校生メディカル講座」では、大学の教育担当者が出身高校に出向いて講義を行います。本号には、小樽潮陵高校と岩見沢東高校の2校で行われた講義についての記事が掲載されています。

また、ここ数年、秋発行の本誌には医師臨床研修マッチングに関連した記事が掲載されてきました。本号にも、「学生の見たマッチング、研修病院選び」という記事があります。マッチングは"就活を左右する"と位置づける医学生の緊張感が伝わってきます。ちなみに、第45号(2010年10月発行)には「契機としてのマッチング」、第41号(2009年11月発行)には「臨床研修マッチングに参加して」という臨場感あふれるマッチング体験記があります。

既刊の記事の参照には、本誌のホームページ版が 便利かと思います。

(広報編集委員 佐藤 松治)

--- Home Page のご案内 ---

医学研究科/医学部医学科広報は

http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受付けメールアドレスは、

goiken@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科/医学部医学科

発 行 北海道大学大学院医学研究科·医学部医学科 広報編集委員会

060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡 先 医学系事務部総務課庶務担当

電 話 011-706-5892

編集委員 田中 伸哉 (委員長)、白土 博樹、

玉城 英彦、佐藤 松治